

プロローグ

人が運命を感じるのは大抵、起こる筈の無い出来事が偶然起こってしまったその瞬間である。待ち合わせもしていないのに恋人と街中でばったりと出逢ってしまったたり、生き別れになった親子が数十年後に再会したり、風に飛ばされた帽子が再び自分の元へと舞い戻って来たり、空に無数に散らばる星屑の中から、たった一つの星だけが選び出されるほど果てしなく低い確率。それが運命なのだと言はう。

しかし私が思うに偶然や運命などというものは、不可思議な現象に対する人間の作った都合の良い言い訳に過ぎない。何故なら、全ての人間は神に操られて生きていくからだ。ただし神と言っても、真つ白な髭を生やした老人が天高くから下界を眺めているとか、そんな稚拙なイメージを私は抱いている訳では無い。そう言えば世の中には宗教というものが多数存在するが、信仰神は常に人の姿に具象化されている。やはり目に見えぬ存在は崇拜しにくいし、人は人以外を尊ぶ事が出来ない生き物だからでは無いだろうか。

私のイメージしている神とは、人が生まれてから死ぬまでの言動全てを司っている、誰の目にも見えぬ存在である。私が今こうしてパソコンのキーをタイプしている事も、一ヶ月前の我が子の死も、全て神が創り出したシナリオに沿っての事だ。絶対に逃れる事は出来ない。例えば意に反して今私がこのパソコンを叩き壊したとしても、神がそうする様に仕組んでいただけの事だ。

私同様、数奇な人生を歩んできた親友が居る。彼女の両親は中学の頃に不慮の事故で亡くなり、仲の良かった妹も数年前に病死した。その直後に夫と離婚するなど不幸の連続だが、それ以来吹っ切れたのか、それとも元々が前向きな性格なのか、神のシナリオを楽しむ余裕すら見せている。私がまだ黎れいを身籠もっていた頃、彼女が明るい表情で話していたのを思い出す。三年間メールで文通を続けていた彼女と直接交流を持ち始めて二ヶ月経った、ある日の事だ。

「なるほど。今こうして紅茶を飲みながら貴女と歓談している事も、神様のシナリオ通りというわけね？」

「ええ。私、時々そう思うの」私は頷く。「登場人物全員が幸せな物語って、面白く無いじゃない。幸福な人が居れば不幸な人も居る。だから物語は面白くなる。今の世の中って、まさにそんな感じでしょう？」

「でも一番不幸なのは、きつとその神様自身」

彼女はにっこりと微笑む。「ただひたすらストーリーを描き続けるだけ。こんなに美味しい紅茶を、実際に舌で味わう事が出来ないもの」

紅茶を飲むのと、世界中の人間の人生のシナリオを描くのであれば、間違いなく後者を選ぶだろう私にとって、その彼女の理屈はよく理解出来なかった。そんな彼女の生き方を否定する訳では無いが、最愛の息子を失った私には、次第にその想いが強くなるばかりだ。

私がこの世界の全てを操れるのなら、黎だけは死なせないのに――。

黎は毒死だった。テトロドトキシシンと言う、薬物に疎い者でも一度はその名を聞いた事のある有名な毒物だ。一般的にフグの体内に含まれている毒素だが、事件当日の我が家はフグなど一欠片も無かった。警察は誰かがその毒物を飲ませた可能性を疑っていたが、

その夜は私と黎しか部屋に居なかったので、私が犯人で無い限り不可能な殺人事件である。毒を仕込んだカプセルを黎に飲ませるといふ時限式の方法も当然考えられたが、検死結果によると、胃の中からはカプセルを構成する成分の類は一切発見されなかったのだという。つまり毒物は生のまま黎が服用してしまったという事になる。

では黎は何故死んだのか。何故死ななければならなかったのか。その真実を全て知ってしまった時、息子を殺したのは人間では無く、やはり神の仕業なのだと私は確信した。人が人を裁く事は簡単だが、人は神を裁く事は出来ない。裁けないなら、せめて許し難いこの神の行いを記録しておこうと思った。

そして私は今、こうしてパソコンに向かっている。

さて、果たしてどこから書き始めようか。最初は事件当日の朝から綴るべきだろうかと思っただが、その日の記憶は既に曖昧になりかけていた。苦悶に満ちた黎の表情をまた思い出すのが怖くて、私の心があの日の記憶へのアクセスを避けているのだ。となると、やはり真実へと近付くきっかけになつたあの日から――神のシナリオを楽しみ続けるあの親友と再会した日から、この記録を書き始める事にしよう。

この作業が進むにつれ、私には少しだけ思い直す事があつた。やはり一番不幸なのは、彼女の言う通り神自身かも知れない。幾つもの罪を背負いその重さに耐えながら、永遠に生きてゆくのみだから。

1 伊織

息子の葬儀を終え一週間が過ぎた八月末日の夕方、抜け殻状態をようやく脱した私は、唯一無二の親友である北嶋伊織きたしまいおりのマンションを訪れていた。高級住宅街のど真ん中に胸を張って建っているそのマンションにもやはり高級感が漂っていて、相変わらず私の給料ではローンすら組めそうに無いのが一目で思い知らされる。

伊織は私の知る人の中では、最も才能に恵まれた人間である。生まれつき天才肌で、現在は作家業に専念する傍ら、趣味でピアノを弾いたり、コンピュータでデザインをしたりもする。彼女に不幸が多いのは、そんな多才な性質とのバランスをとるためかも知れない。俗に言う「天は二物を与えない」というやつだ。

私はエレベーターで七階に上がり、正面突き当たりにある部屋のインターホンを鳴らした。はい、と言う女の子の声が聞こえ、すぐにドアは開いた。

「こんにちは」

現れた女の子と挨拶を交わす。笑顔で私を出迎えてくれたのは、八歳になる伊織の娘で名前は「なみき」。漢字は無いらしい。ぱっちりとした茶色の瞳と艶やかな栗色の髪は、母親と瓜二つだ。外国人との間に生まれたハーフらしいのだが、母親に似すぎているためか、父親がどんな人物だったのか想像すらつかない。

「つかさ、ごめんなさい、今手が離せないの！ 上がって適当にくつろいでー」

奥から友人の大きな声が聞こえる。何をしているのだらうと思っていると、お母さんドーナツを揚げてるの、となみきが教えてくれた。そう言われてみると、仄かな甘い香りが鼻に触れた。

なみきに連れられる様にリビングに向かうと、テーブルにはもう一人女の子が居た。天

真爛漫といった感じのなみきに比べればかなり大人しめの性格で、私に向かって静かに頭を下げた。この子と会うのは今日が二度目だ。

「ユッコちゃん、こんにちは」

私の挨拶を受けて、ユッコ（本名は知らない。ユウコだろうか？ それともユキコだろうか？）はまた黙って頭を下げた。なみきのクラスメイトであるその少女は、よくこのマンションに遊びに来ているらしい。

「上出来」伊織がキッチンの方から揚げたてのドーナツを載せた皿を二つ持って現れた。「なみき、ユッコちゃんと部屋に行つてなさい」と片方の皿をなみきに渡すと、二人の子供は各自飲み物を持ってバタバタとリビングから去っていった。私は空いたソファに腰掛けると、久しぶりに会う友人の方を見つめる。

「娘のリクエストなの」伊織はドーナツ皿をリビングのテーブルに置きながら、「甘やかし過ぎかなって思うけど、ドーナツ作つてって言われると、私も急に作りたくなくなってしまつて」

「そうやってリクエストに応えられる伊織は凄いよ。私なんか料理はからつきだし。店で買ってくるのがオチだわ」

「でも、お店のドーナツの方が美味しいんじゃない？」

「駄目よあんなの。その店の味を押し売られてる感じがして嫌。やっぱり料理って言うのは、自分好みに味付けされた、自家製で無いと。……なあんて、毎日コンビニ食の私が言うなって話だけどね。それでも子供が生まれたら、ちゃんとした料理を作れる様にと、平日頃から修行して来たつもりだったのよ……」

「黎君が亡くなった原因、まだはつきりしないの？」

「うん。警察からは、黎はフグの毒で死んだんだって……。ただ、それだけ」

伊織は紅茶をカップに注ぎながら頷いた。友人のその若々しい横顔は、とても私と同じ三十二歳に見えない。いや、もしかしたら私の方が十歳ほど老けてしまった可能性もある。黎が死んだ日、鏡越しに見た私の顔は酷い物だった。何かの病気で死んだのなら、きっとこんなにも気に病む事は無かつただろう。手足をばたつかせながら藻掻き苦しむ黎の表情が頭にこびりついて離れない。そしてその姿を思い起こす度に、私の寿命は一つずつ削ぎ落とされてゆく気がしてならなかった。

「黎が死んだ時、その場に居たのは私だけだった。だから警察にはさんざん疑われたわ。でもさ、一体どこの世界に愛する息子を殺す母親が居るって言うの？ ……つて、それが困った事に居るのよね、この世の中。実に下らない事で子供を殺す馬鹿が沢山居る」

私は吐き捨てる様に言った。「だけど私は違う。貴女なら分かるでしょう？」 伊織

「ええ」伊織は目を細める。

「殺したのは、絶対にあいつよ」

「別れた旦那さんの事？」

「そうよ。あいつが何らかの手段を使って、殺したとしか考えられない」

別れた夫・和樹^{かずき}は結婚当初はとても優しい性格の男だった。だが私に子供が出来たと知った時、急に暴力を振るい始め、何度も流産させようとした。その真意は分からない。私は子供を守った。殴られても、階段から突き落とされても、この子だけには傷をつけまいと必死だった。和樹との離婚調停後、逃げる様に元住んでいた街から離れた。伊織には、こ

の件で随分と相談に乗ってもらったものだ。私がそれほど子供を大切に出来たという事を、彼女は誰よりも知っている。

「その人の事、警察には話してみたの？」

「勿論話したわ。でもあいつには完璧なアリバイがあった。同僚と九州に出張中だったって。だけど毒なんて遠隔操作でも飲ませられそうなものでしょ？　アリバイなんて関係無いわよ。むしろ事件当夜にそんな白々しいアリバイがある方が疑わしい。そう思わない？」

伊織は何も答えず、黙って紅茶を差し出した。私はいつの間にか息切れするほど興奮して喋っていたのだという事に気が付き、慌てて肩の力を緩め、カップに口をつける。その紅茶の温かさは、私を落ち着かせるのに最適な温度だった。

「……ごめん伊織。私、本当はこんな陰口を叩きに来た訳じゃ無いのに」

「ええ、分かっている」

彼女は静かに言った。「貴女は美味しい紅茶を飲みに来た」

本気で和樹を疑っている訳では無かった。しかしこれが事故や自然死では無く、殺人なのだと思うと、誰かを疑わずには居られない。よく家に遊びに来る叔父、託児所のベビーシッター、隣近所に住む老夫婦……黎の事を知る人間は、その誰もが私達親子を大切に思ってくれる存在だ。だから、黎を殺しそうな性格の人間は和樹以外に居ない。ただそれだけの事だ。

「事故の可能性は、本当に無いのかしら？」

伊織が突然呟いた。「例えば、黎君が当日触れた物や口に入れた物の中にフグ、もしくはフグ毒の成分が含まれている物があったのかも知れない」

「あり得ないわよ」私は即答する。「そんな物があればとくに警察が調べてる」

「事件が起こった日、黎君はいつもの託児所に預けられていたの？」

「そうよ。あの日は残業で少し帰りが遅くなってしまったけど、ベビーシッターさんに勤め先までちゃんと送り届けて貰った。でも、よくある事だから」

私は週三回、小さな雑貨店に勤めている。店の営業時間である午前十時から午後五時までは黎を近くの託児所に預けているのだが、事件当日の閉店間際は注文していた輸入物の商品が多数届いたため、そのチェック作業に七時半まで掛かってしまった。託児所の終業時間が七時までのため、その時間になっても連絡が来ない場合は、店まで直接黎を送り届けてもらう段取りになっている。

その託児所のベビーシッター・幸村久美は、心優しいがとても気の弱い性格だ。だからこそ私には彼女の事は信用出来る。黎に何か嫌な想いを抱いていたとしても、毒を飲ませる様な事は決してせず、めそめそ泣き出してしまふ様な人間だからだ。

勿論、その託児所にフグの類が置かれている筈も無い。当日託児所を訪れた者の中にフグを食べたとか釣ったなどと言う人間も居ない。その辺りは警察も逐一調査済みだろう。

私がそれを話すと、伊織は紅茶をすすりながら思いついた様に顔を上げる。

「黎君には、指を舐めたり、くわえたりする癖はあった？」

「うん。まあ生後六ヶ月なんだから、舐めない子を探す方が難しいんじゃないの？」

「その指に毒が付いていた可能性は？」

「確かに何本かの指に毒は付いていたらしいけど……」

私は警察から聞いた話を思い出して言う。「藻掻き苦しんでいる時に口に指を入れて、

その時に付いた可能性もあるんだって。だから一概に指に毒が付いていて、それを舐めたとは言えない。第一、指でちよこつとフグを触つたのを舐めたところで、あんなに苦しんで死んだりしないんじゃない？」

しかし伊織は首を横に振る。

「テトロドトキシンの致死量は青酸カリの百分の一。成人なら二ミリグラム。赤ちゃんなら……指にほんのちよつと付いた程度の量で、死んでしまうわ」

「詳しいのね」私は目を丸くして驚いた。「伊織って医学部だったっけ？」

不意にボタンという音がして、なみきが空の皿を抱えて戻って来た。

「ねえお母さん、ユッコちゃんと公園で遊んで来ていい？」

「いいけど、五時までには帰りなさい。車にも気をつけて」たつたさつきまで厳しい表情を向けていた伊織が、なみきの前では優しい母親の表情へと変わっている。

「はい。ドーナツ、すごい美味しかったよっ」

なみきは満面の笑みを浮かべていた。「おばちゃん、またねっ」

「ばいばい」

私はパタパタと駆けていく二人に手を振りながら、もうおばちゃんと呼ばれる歳になってしまったのかと肩を落とす。

「可愛らしいわね。私達にもあんな時代があったのよね」私はドーナツを摘んで言う。

「つかさは、どんなタイプの子供だった？」

「もう、はちゃめちゃよ」

私の返答に、伊織はクスツと笑った。「勉強が大嫌いで、成績はいつもドンケツだったなあ。基本的に体育会系だったのよね、私。猪突猛進、て言うのかな。まさにあの四字熟語がぴったりのクソガキ。伊織なんかは絶対優等生タイプでしょ？ 四字熟語にすると……容姿端麗？」

「私もつかさと同じ、はちゃめちゃだったわよ」

「まさか。あり得ないでしょう」

「ううん。成績だって……下から、四番組くらいだったかな」

伊織の揚げたドーナツは私の口に合った。

店で買うドーナツというのはどうも若者好みに味付けられている気がして、美味しいと思つた事は一度も無い。自分が若くない事を認めている様で、これはこれで空しくなるが。以後はたわい無い雑談を繰り返し、一時間ほど経つてから、私はおいとまする事にした。

「今日来たのは本当はね、伊織にこの謎を解いて貰おうと思つたのよ」

去り際にかけた私の言葉に、彼女はキョトンとした様子で首を傾げている。

「私はミステリ作家じゃ無いわ」

「貴女の作品は全部読んだ」私は真剣な眼差しで彼女を見つめる。「正直、凄だと思う。誰もが思い付かない独創的な発想力、そして表現力。たとえそれがミステリじゃ無くたって、私は伊織のその素晴らしい才能に、どうしても期待してしまうのよ」

「……ありがとう」彼女は困惑した表情をしていた。「……でも、ごめんなさい。私はつかさと言うほど素晴らしい人間では無いし、小説だって、もっと素晴らしい物語を描ける人は大勢居る。テレビドラマの様に個性的な発想だけで事件を解決出来るほど、現実には甘くない。勿論、貴女を助けるための協力は惜しまないけれど、それほど多くの期待を抱かな

いで欲しい」

「私がどうして伊織にそれほど期待しているのか、教えてあげましょうか」

「えっ？」

「この世界の全てが神の作った物語だとしたら、ヒロインはきっと貴女だからよ。伊織」

伊織は驚いた顔で私を見る。「少なくとも私はそう、信じてるわ」

2 久美

ベビーシッターの幸村久美は私より三つ年下だが、既に二児の母だ。息子達を自分の勤める託児所に連れて来て面倒を見ているなどすっかりした所はあるが、どんな子供に対しても決して臆目で見たりせず心優しい対応をしており、子供からも保護者からも些か定評がある。

伊織のマンションを訪れた翌日、私は久美の勤める託児所へと向かった。「ちびっこハウス」というシンプルな名前が付けられたその託児所は、私の自宅と雑貨店のちょうど中間地点にある。仕事の行き帰りに立ち寄る事が出来るので大変便利だ。

黎の死の真相が彼女の口から聞けるとは思っていないが、黎の最後の日を最も共有したのは久美だ。その日黎がどんな行動を取っていたのか、どんな顔で過ごしていたのか、警察は既に捜査済みだろうけれど、自分自身で彼女に確かめてみたかった。

山裾に近いという事もあり、ツクツクボウシのけたたましい鳴き声が辺り一帯を包み込んでいる。その声に負けず劣らず、通りの向こうから学校帰りの小学生集団が賑やかに歩いて来るのが見えた。そうか、今日から学校が始まるのだ。

「コーキ君は、ハワイに行ったんだって」「へーっ、いいなあ」
すれ違い様に彼らの大きな声が耳に入ってくる。

「ミカりんは、どこか行った？」「うーん、花火大会ぐらいかな」「あっ、ボクも行ったよ」「あたしも。一緒に見たかったねー！」「ねー！」

そんな彼らを横目に見ながら、ちびっこハウスの引き戸を開いた。玄関ホールが子供達の遊び場になっている。

「おや、高杉さん。これはどうも……」

オーナーの八尾健児がびっくりした様子で私に声を掛ける。二、三歳ぐらいの子供達と積み木遊びしていた様だ。子供達は一瞬私の方に目を向けたが、すぐにまた遊びに熱中し始める。ホールに幸村久美の姿は無かった。

「こんにちは」私は深々と頭を下げる。

「あの、この度は大変ご愁傷様でした」

今年還暦を迎えるという八尾だが、いつ見ても小熊の様に愛らしい顔立ちをしている。実際熊の様に大きな身体なので、子供達からは「熊さん」というニックネームをつけられているほどだ。黎の葬儀に参列した彼が、声を上げておうおうと泣いていたのを思い出す。きっと心の底から子供が好きなのだろう。

幸村久美の姿はこのホールには無かった。きっと乳幼児用のベッドルームで子守をしているに違いない。

「幸村さんにお会いしたいんですけど」

「はい、呼んできましょう」

八尾が立ち上がりかけた時、タイミング良く空の哺乳瓶を持った久美が現れた。

「高杉さん……あ、あの、こんにちは」

久美は八尾以上にびっくりした表情で二度頭を下げた。黎の葬儀からまだ一週間しか経っていないと言うのに、酷く痩せ細ってしまった様に見える。元々華奢な体型なのだが、鉛筆から針金に縮んでしまった様な、そんな印象を受けた。

「少しお話ししたいの。五分ほどで済むわ」

「あ、ええ……では、こちらへ」

もしかして黎の死の責任を取らされると思っているのだろうか？ 勿論私にそんなつもりは毛頭無い。久美が黎に毒を飲ませたというなら話は別だが。

彼女は空の哺乳瓶を置く事も忘れ、それを左手に持ったまま、私を応接室へと連れてゆく。その部屋は六畳ほどの広さだが、蒸し暑い空気が占領していて、彼女は慌てて窓を開いた。今お茶を入れますと久美は言ったが、私は丁重に断った。

席につき向かい合ってから、私は少し表情を和らげ口を開いた。

「あのさ、そんなに緊張しないでね。黎が死んだのは、何も貴女のせいじゃ無いんだから」
「は、はあ……でも……」久美は今にも泣き出しそうだった。

「実を言うと、幾つか確認したかっただけなのよ。警察からは詳しい捜査状況が入って来ないんだもの。被害者の実の母親だと言うのにな」

「確認……と言いますと？」

「黎が死んだ日、何か変わった事は無かった？」

「……いいえ。いつも通りです。本当です」

「別に私、貴女を疑ってる訳じゃ無いよ」

私は微笑んだ。「ただ真実が知りたいの。黎が毒を飲んで死んだ事が、自然現象である筈が無い。貴女も母親ならこの気持ち、分かるでしょう？」

「はい……」久美は目頭を押さえて、小さく呟く。

「どんな些細な事でもいい。例えば、ここで預かっている子供の一人が黎に触ったとかね。勿論それは悪意あつての事じゃ無く、ただあやそうとしていただけかも知れない」

「それは絶対にありません。ベッドルームには近付かない様、他の子供達にはいつも言い聞かせていますから。……それにあの日、他の子供達の面倒はオーナーが見ていましたので、私はずっと黎君の傍に付きつきりでした」

「目を離さなかった？ 一度も？」

「……確かにずっと黎君を眺めていた訳じゃありませんけど、ベッドに寝かせて、泣き出したらオムツを替えたり、ミルクを与えたり、子守歌を歌ったり……しつかりと、一生懸命面倒を見ていたつもりです」

彼女はとうとう泣き出してしまった。

「ごめん、訊き方が悪かったわ。本当に貴女を責めてる訳じゃ無いのよ。泣かないで」

「……すみません」

彼女は涙をハンカチで拭い始めた。ベビーシッターのベビーシッターが必要かも知れないな、と私は心の中で呟く。

「その日、黎が飲んだミルクはどこに保管されていたの？」

「朝業者から届いた乳児用の粉ミルクを、涼しい場所に……」

しかし、もしミルクに毒など入っていたとしたら、飲んだ途端に死んでしまうだろう。自分で思い付いた可能性をすぐに自分で否定してしまい、自身の頭の悪さを呪いたくなる。

「……それじゃ、おもちゃはどう？ 黎が触った物は無い？」

「ありません。警察の人も色々調べていたみたいですが、この託児所にある物の中に、毒の付いている物は一つ無かったそうです」

警察からそこまで聞かされていなかった。だがそれも当然か。託児所には他の子供達も大勢居るのだから、安全性の問題、つまりこの託児所自体の存続危機の問題が何よりも大きい。

「黎には、本当に何も変わった様子は無かった？ 少し苦しそうだったとか」

「いいえ。何度か泣き出しましたが、それもいつもと同じぐらいの回数ですし、泣き方にも違和感はありませんでした。特に変わった様子は無かったと思います」

「……そう」これ以上の質問は思い浮かばなかったので、私は立ち上がった。「ありがとう、もういいわ」

「高杉さん……私、この仕事、辞めようと思うんです」

久美は座ったまま、沈み込んだ口調で言った。私は驚いて、

「どうして？ 黎の事が原因？ それなら本当に貴女には何も……」

「いいえ」久美は少し微笑む。「シッターとしても、母親としても、元々向いていなかったのかも知れません。時には厳しく子供達を叱る事も必要だって、主人にもオーナーにもいつも怒られているんですけど、私はどうしてもそれが出来ない人間なんです。子供達を誰一人傷つけたくなくて、いつも優しくする事しか出来ない、弱い人間なんです……。こんな私じゃ駄目なんです。だから……」

「だから？」

私の胸がカッと熱くなった。「辞めるって言うの？ シッターも、母親も」

久美は何も言わなかった。

「自分の弱さを認め、何もかも投げ出す事で全てが解決するとも思ってるの？ 子供達は貴女の事が大好きなんだよ。誰一人貴女を嫌ってなんかいないのに。貴女が離れる事で却って子供達を傷つけてしまう結果になるって思わないの？ どうして貴女自身が強くなるうとは思わないの？ 人間は誰だって強くなれるんだよ。そんな簡単な事も出来ないでリタイヤするのなら、最初から子供なんか産むんじゃ無いわよ！」

彼女は俯いたまま、肩を小刻みに震わせている。

「貴女の事を見損なった。こんな女に大事な黎を預けてたなんて。……そうね、ある意味、貴女が殺した様なものだわ。あの日、本当は黎から目を離していたんじゃないの？ 本当は毒物があったのに気付かなかっただけじゃ無いの？」

少し言い過ぎだ、と私は思った。しかし次々と込み上げてくるこの怒りは、簡単に抑えられそうに無い。

「……さよなら。もう二度とここには来ないわ」

私は泣きべそをかいている彼女を軽蔑の眼差しで一瞥すると、応接室を乱暴気味に立ち去った。怒りに満ちた表情を見られぬ様、八尾と目を合わせる事無く、私は足早に託児所を後にした。

猛烈に悔しかった。愛情をかけて育てていた息子の命を唐突に奪われてしまった私と、二児の母でありながら子育てを破棄しようとしている久美。神はどうしてこんなシナリオを書いたのか。殺す相手を間違えているとしか思えなかった。

私は携帯電話を取り出し、何となく伊織にコールした。彼女はすぐに電話に出た。

「……もしもし、伊織？ 私。今晩久しぶりに飲みに行かない？ ……そっか。なみきちやんが居るもんね。……うん、ごめんね。……ううん、そうじゃ無いのよ。ちよつと今そういう気分なだけ。……もう大丈夫よ。またね」

3 和樹

ゴールデンハイツというその名前だけは無駄に立派だが、外観は薄汚い古びたマンションの三〇一室が私の住まいである。クモの巣が張っている箇所は幾つかあるものの、ひび割れや雨漏り、シロアリが荒らした跡などは一切見当たらないので、住み心地という点では一般平均よりは上なのかも知れない。

何よりも大きなポイントは、住民の大半は老人という点だろう。つまり非常に静かだ。黎が夜泣きをしても、耳が遠いせいか全く文句が出た試しが無い。雨の酷い日は黎を表に出したくなくて、隣室に住む老夫婦に預けていた事もある。彼らの面倒見は託児所並みに良い。本当は仕事に出掛ける時にはいつも預けたい所だが、金が掛からない分、気を遣ってしまうので、そんな真似は出来ない。

ゆったりと昼食をとって戻って来たつもりだが、まだ午後一時を回ったばかりだった。この時間は三〇二室の老夫婦は散歩に出ていて居ないはずだ。

自室に鍵を差し込もうとした時、私は違和感に気付いた。部屋の中から音が聞こえる。そして確かに閉めたはずのドアの鍵は開いていた。慌てて部屋に入ると、居間で寝転がってテレビを見ている男の後ろ姿が目についた。

「和樹……」

「よう。邪魔してるぜ」和樹は私の方を振り返らずに言った。

「何……してるのよ。どうやって入ったのよ！」

「大家のジジイを騙してね」

和樹はようやくこちらに振り返った。汚らしい無精髭が顎を覆っている。結婚当時とは全く別人とも思える顔だった。

「なかなか頑固そうなジジイだったけどさ、俺とお前のツーショット写真を見せて夫婦だつて言ったら、あっさり信じて中に入れてくれたぜ」

「何て人なの」私は下品な番組を流し続けているテレビの電源をリモコンで消し、和樹を睨みつけた。「お願い。帰って！」

「おいおい随分だなあ。俺は黎の父親だぜ？ 線香の一本ぐらいあげさせてくれたっていいじゃねえか」

「何が父親よ。殺そうとしていたくせに！」

「生後六ヶ月でも、いっちょまえに遺影なんてもんがあるんだな」

和樹は、壁に立て掛けてあった黎の写真を指差す。「葬式代はやっぱり大人並みにかかったのか？ 可哀想に。今のお前にそんな余裕なんか無いだろうに。あの時俺の言う事を聞

いて素直に子供をおろしてりゃ、こんな惨めな事にはならなかったものをさ」

「……やっぱり貴方が殺したのね」

「ふん。だったらどうするんだよ？」

「私が貴方を殺してやる！」

すかさず私はパソコンデスクの抽斗の中からカッターナイフを取り出し、和樹の方に刃先を向けた。殺してやりたいのに、足が一向に動かない。かろうじて動いているのはナイフを持つその両手の震えだけだった。

「ははっ、お前のママ、やっぱり馬鹿だわ」

和樹は黎の遺影に唾を吐きかけると、ゆっくりと歩み寄り、拳で私の顔を殴った。毒牙に痺れた様な感覚が全身を襲い、私は床に叩き付けられる様に尻餅をついた。思わず目の前が真っ白になる。視界が戻った頃には、既に和樹が奪ったカッターナイフが、私の鼻先に突き付けられていた。

「……殺しなさいよ」

「そういう訳にはいかない」和樹は不気味な笑みを浮かべる。「今度再婚するんでね」

私は急激に戦意を失い、その場に横になった。

「待ってる間、缶ビールを一本戴いたぜ。黎の死に献杯だ」

和樹は空になった缶を私の頬に当て、床に放り投げた。「お前の大好きな神様ってやつは、いつだってお前の味方にはなってくれないみたいだな」

彼はそれだけ言うとお出で行った。

私は暫く床に寝そべったまま、虚空を見つめる。

こんな惨めなシナリオには絶対にさせない。黎の死の真相は、私自身が突き止めなくては。そう、これは私の物語なのだから――。

4 磯部

翌朝、幸村久美から電話があった。もう話したくも無いと思っていた相手だが、黎君に関する事ですと強い口調で言われたので、託児所の近くの公園で落ち合う事になった。

「私、一つ思い出した事があるんです」

挨拶よりも先に久美はそう言った。昨日までとは別人の様でしつかりと気合いの入った顔つきをしている。

「黎君を高杉さんの居る雑貨店まで送り届ける途中、私、オーナーからの用事でカジマ運輸の南営業所に寄りました」

「カジマ運輸？」私は思わず聞き返す。

「はい。雑貨店のすぐ近くです。一分もしない用事だったので、警察にも話してなかった事なんです……」

「詳しく聞かせて」

「オーナーが発注したおもちゃの中に、一つだけ不良品が混じっていたんです。それは小さなおもちゃで、ほんの少し傷が入っていた程度の事なんですけど、それでも子供が怪我をしたら大変だからって、メーカーにクレームを入れて、その品を送り返す事になったんです」

確かに八尾の几帳面な性格を考えると、そうするのも頷ける。

「黎君を送るついでに南営業所から直送しようと思ひ、ハンドバッグにそのおもちゃを入れ、黎君はベビーカーに乗せ、一緒に行きました。そこで伝票を書いている時に……眼鏡をかけた六十歳ぐらいの白髪の従業員が、黎君をあやしていました」

「その人は、黎に触ったのね？」

「そこまでは覚えていません。……でも子供好きそうな、とても人の良い方でした」

運送会社ならフグを扱う事もあるのでは無いだろうか。その従業員が事前にフグを触っていたとしたら？ そしてその手で黎の手に触れていたとしたら？ あり得ない話では無い。

「ありがとう。よく話してくれたわね」

「……高杉さん、昨日は本当にすみませんでした。高杉さんの言った通りです。私、もつと強くなります。ベビーシッターとしても、母親としても、胸を張って子供達と接する事が出来る様、強くなります」

「私も昨日は言い過ぎた。黎が死んだのは貴女のせいなんて、酷い事を言っでごめんなさい。もし今度また私が子供を産む事があつたら、また貴女にシッターをお願いするわ」

「はい、是非」

久美は頭を下げた。「では仕事がありますので、これで」

「ねえ幸村さん。……あの日、黎、笑ってた？」

「……はい。とても」

「そう。良かった……」

私の心にのし掛かっていた重圧が、少しだけ軽くなった気がした。

久美と別れ、私はカジマ運輸の南営業所に向かった。何台もの大型トラックが出入りするため門は広く作業場も巨大だったが、事務所自体は小さなプレハブ小屋の様な建物だった。

事務所のドアを開けると、何人かの従業員が黙々と仕事に専念している様子だった。おそらく私が入って来た事も気付いていないに違いない。クーラーが効きすぎていて、少し肌寒かった。

「ちょっとすみません」

私は一番入り口に近いデスクに座っている若い女性に声を掛けた。

「あつ、はい？ 何でしょうか？」

女性は慌てて笑顔を作った。営業用スマイルというのは、こういうのを言うのだなと思った。私は久美に聞いた特徴の男について尋ねてみた。

「それは多分、磯部課長の事ですね」

「その人は今、こちらに居ますか？」

「はい。朝一会議に出ています。もうすぐ戻られると思いますよ。そちらでお待ち下さい。今お茶をお入れ致しますので」

「あ、いえ。どうかお構い無く……」

私をお得意先か何かと勘違いしているのだろうか。妙に腰が低かった。

「ねえ、変な事を訊きますけど、この運送会社ってフグとか、扱う事ありますか？」

「フグですか……そうですね」

女性はお茶を差し出しながら、ウーンと唸った。「フグの匂って、冬ですよね。この季節に扱う事は、滅多に無いんじゃないかと……。そもそも水産関係は、基本的に別の営業所の管轄なので」

「じゃあフグを捌いたりする事も無い、か」

「そんなのありませんよ」

「磯部さんはそういった魚料理を作るのが趣味、って事は無いですか？」

「課長は魚が大の苦手なんで無理ですよ。苗字は磯部って言うくせにね」

女性は自分で言ったジョークで笑い始める。面白くも何とも無いので、私はむっとした表情で彼女を睨んだ。

お茶を飲んで待っていると、作業服を着た年配の男が事務所にやって来た。久美の言った通り、白髪に眼鏡の人の良さそうな男。「課長、お客様です」と女性従業員が声を掛けたので、私は立ち上がって磯部に一礼する。

「私に何か？」 磯部は若干首を傾げながら、私を見た。

「二週間ほど前、赤ん坊を連れた女性がこの営業所に来たのを覚えていますか？」

私はダイレクトに質問を浴びせた。「夜七時頃です」

「えっ……」彼は瞬きを繰り返し、「どうだったかなあ……」

「その時来たのは、この近くにある『ちびっこハウス』っていう託児所で勤めている幸村という人なんです、覚えていませんか？」

「うーん」磯部は頭を掻く。「いや申し訳無い。最近物覚えが悪くて」

「課長、もしかして花火大会の日じゃありませんか？」

先程の女性従業員が横から口を挟んだ。「ほら課長、あの赤ちゃんにママと花火見に行くの？って尋ねてたじゃないですか」

「あっ！ あの時の！」 磯部は思わず手を打った。

「思い出しました？」

「うん、うん。あったね、そういうの」 磯部は微笑んだ。「母親の顔は見てないけど、赤ちゃんの事はよく覚えてるよ」

「母親は私です。その時黎を連れていたのは幸村というベビーシッターです」

「そうなんですか。実に可愛いお子さんですねえ」

「先日亡くなりました」

「えっ……」

磯部はあんぐりと口を開けた。

「驚かせてすみません。黎が何故死んだのか、その原因を突き止めるために、磯部さんに会いに来ました」

「どういう事ですか？」

「詳しくは言えません。磯部さんを疑っている訳でもありません。あの日磯部さんが黎と会った時の事を、詳しく聞かせて頂きたいんです。それだけ聞いたらすぐに帰ります。お手間は取らせません」

磯部は「困ったな」と呟きながら、それでも必死で当時の記憶を思い出そうとしてくれていた。たとえこの人が黎に毒を与えた張本人だとしても、悪意など何も無いのだろう。勿論、彼を責める気など無かった。真実が分かりさえすればそれで良かった。

「……いや駄目だ、覚えてないや。親戚が子沢山なのでね、赤ちゃんの顔を見る事など、しよっちゅうなんだよ」

「では磯部さんは、可愛い赤ちゃんが目の前に居たら、どんな風にあやしますか？」

「そうね……ベロベロバーとか、イナイイナイバーとか……」

「手に触れたりは？」

「するかも知れない」

黎が癖で舐めた指には毒がついていた。磯部の手が黎の指に触れた。その磯部の手にフグ毒がついていた。私は頭の中で図を描き起こす。

「黎が来る直前、磯部さんは何かお仕事をされていましたか？」

「おかしな事を訊くね。当たり前でしょう」

磯部は苦笑する。「山下さんならともかくね」

「ひどおい、私はちゃんと仕事してますよ」先程の女性従業員が口を膨らませる。

「フグを捌く様な事はしていませんでしたか？ もしくはフグを扱っていた人が周りに居たとか」

「ありません」

「その仕事は危険な薬品を使う仕事ですか？」

「まさか。書き仕事のどこに危険な薬が？ ……あのね、どういう意図があつてそういうおかしな質問ばかりされるのか、よく分かりませんが……。そろそろ不愉快ですよ。忙しいので失礼していいですか？」

「もう一つだけお願いします」

私は必死に頭を下げる。「すみません。もう一つだけ……」

「……何？」

「ずっと書き仕事をしておられたんですか？」

「そうだよ。……六時頃からずっとね」

「何で書かれていましたか？」

「何でって……書く道具の事？ ボールペンだったけど」

「見せて頂けますか？ それさえ確認すれば今度こそ帰ります」

磯部は舌打ちしながら、自分のデスクへと戻って行く。しかししばらくデスクの上を見回して、次第に訝しげな表情へ変わってゆく。

「おかしいな。山下さん、あの時使っていたボールペン、どこにあるか知らないか」

「あつ。あの銀色のやつですよね？」と山下。

「花火大会の日なら、確かあれを使って仕事をしていたと思うけど」

「あのボールペン、森口さんが怒ってましたよ。課長、森口さんのボールペン勝手に使ったんでしょっ」

「ああ、あれは森口君のだったのか……」

「何でもかんでもテーブルの上に置いてある物を私物化しないで下さいよ。私のホツチキスも、平沢さんの万年筆も、課長のデスクから見つかったんですよ」

「いや申し訳無い。ついいつもの癖でね」

「あのボールペンなら私が責任をもって、森口さんにお返ししましたよ」

「そうかそうか。ありがとう」

磯部は私の方に向き直り、「そういう訳なんで、ここにそのボールペンは無いよ」
「分かりました」

「では私は仕事に戻らせてもらおうよ。失礼」
彼は足早に事務所を出て行った。

5 森口

山下という先程の女性従業員に森口という男について尋ねた所、腰を痛めて今日は休みを取っているのだと言う。私は彼の自宅住所を聞き、カジマ運輸を後にした。

磯部が使っていて、森口が所有していたそのボールペンにフグ毒がついている確証は無い。付いていなければまた一から調べ直すだけだ。しかし私の中では既に、真実までの一本道を歩いているという実感があつた。日は傾きかけているが、夏の昼は長い。後は森口がフグを調理して食べたなどという様な証言が得られさえすれば、私の目的は終わるのだ。森口文也ふみやという名のその男は、年は二十四歳。山下曰くイケメンらしいが、その歳でぎっくり腰になつてしまうとは、何とも情けない。

湯川荘、という札が掲げられているのを確認し、私はそのおんぼろアパートの中へと足を踏み入れた。木造の二階建てで、廊下の床板はギシリギシリと不快な音を立て、今にも壊れてしまいそうだった。

森口の部屋のドアをノックする。すかさず「開いてるよ」という声が聞こえたが、彼が出てくる様子は無い。腰を痛めていて動けないのかも知れない。仕方なく、私は「失礼します」とだけ声を掛け、ドアを開いた。

「誰？」

森口は私の顔を見るなり訊いた。彼は畳の上に俯せになつて、本を読んでいた。山下のイケメンの定義についてはよく分からないが、渋谷ならどこにでも歩いていそうな、普通の青年だった。

「高杉と言います」私はそう名乗り、頭を下げる。

「セールスならお断りだけど」

「ご心配無く。少し貴方にお訊きしたい事があるだけ」

私はそう切り出してから、「二週間前の花火大会の日、フグに触ったりしなかった？」

「……意味が解らない」

「触ったの？ 触ってないの？ それをまず訊かせて欲しいの」

「触ってない」

「本当に？」

「おぼさん。頭、大丈夫？」

私は思わずむっとしたが、彼の言い分の方がもつともだと思った。

「ごめんなさい、詳しく話すわ」

この青年になら本当の事を話してもいい様な気がした。

私は息子の黎がフグ毒で死んだ事、そしてその原因を探っている事、黎の指に唯一触れたのが磯部で、その彼がその日たまたま森口のボールペンを使っていた事などを、すべて説明した。

森口の反応はただ一言、「へえ」だった。

「……もしそのボールペンにたまたまフグ毒が付着していたとしてもね、私は別に貴方を責めたい訳じゃ無いのよ。ただ真実が知りたいだけ」

「じゃあ俺がその日フグ刺しを作って食ったって言えば、全ては解決する訳だ」

「食べたのね？」

「冗談だよ。食ってねえよ」

森口は笑う。「第一、調理免許も無いのに。んな事したら俺だって死ぬじゃん」

「磯部さんが使っていた銀色のボールペン、持ってる？」

「捨てた」

「捨てた？ どうして？」

「インクが切れたから。純粋な理由っしょ？」 森口は煙草に火をつけ大きく吸い込むと、天井に向かって煙を吐き出した。「話はそれだけ？」

「あと少しだけ」

証拠品が無いとなると、やはりフグ毒の出所を探すしか無さそうだ。「そのボールペンはいつどこで手に入れた物？」

「花火大会の朝、駅前で配ってた。ドラッグだか何だかの撲滅のキャンペーンだって言ってたかな。所詮タダで貰える物にロクな物は無いよな。一週間ちよつとでインク切れなんて。ゴミを貰ったに等しいさ」

「でもそのボールペン、気に入ってたみたいね。山下さんが言うには、そのボールペンが無くなって貴方怒ってたって」

「ボールペンが無くなった事に腹を立ててたんじゃねえよ。あの磯部のおっさんが人の持ち物を勝手に使った事に対して怒ってるの。前にもあったんだよな、あのおっさん、俺のマグカップでコーヒー飲んだりもしてるんだぜ。彼女から貰った大切なプレゼントだったのに。マジ信じらんねえよ」

「そんな事にいちいち腹を立ててちゃ、この先長い人生やっていけないわよ」

「おいおい、おばさん、俺の人生相談に来たのかよ」

森口は吸い殻を銀の灰皿に押しつける。「勘弁してくれよ」

「ごめんごめん。……じゃあやっぱりボールペンに毒が付いたとすれば、その花火大会当日しか無いわけか」

「そういう事になるね。本当に毒が付いてれば」

「本当に心当たりは無いのね？」

「無い」

「そう……。ありがとう。それじゃ帰るわね」

私がドアノブに手を掛けようとした時、突然森口が私の身体を抱きすくめ、強引に唇に唇を押しつけてきた。驚いた私は咄嗟に彼の身体を振り払い、下腹部を蹴った。

「いててっ……悪かった！ 謝るー！」

森口は両手で下腹部を押さえながら、縋る様な目つきで私を見る。私は動揺を抑えながら、彼を睨み付ける。

「仮病でズル休みとはガキのやる事ね。上司に言っつてやろうかしら。それとも強制猥褻で警察にでも行く？」

「……ごめん」本当に反省している様な声だった。「……あなたの後ろ姿が、あいつにそっくりだったから、つい……」

「あいつ？」

「今日は彼女の命日なんだよ」

彼は先程まで読んでいた本を開き、その間に挟み込んであった写真を取り出した。森口と同じぐらいの年齢の女の子が、満面の笑みを浮かべて映っていた。

「佐緒里って言うんだ。可愛いだろ？ でも二年前に事故で死んだ。酔っぱらいオヤジの暴走運転車が信号無視で突っ込んで来たのが原因。……馬鹿みたいだろ？ 真つ昼間だぜ？ おまけに見通しのいい交差点だったんだぜ？ 佐緒里の他にも何人かの子供が跳ね飛ばされた。皆、死んでしまったらしい」

私は思わず言葉を失った。

「俺が死ぬなら分かるぜ。俺なんてロクでも無い人間だからな。何で、何で心優しい佐緒里や、無邪気な子供達だけが死んで、何でカスみたいな俺や、人殺しの酔っぱらいオヤジが生きてんだ？ ……こんなの、絶対に間違ってるじゃねえかよっ！」

森口の怒鳴り声が部屋中に響き渡り、壁にひしひしと共鳴を与えた。

「……高杉さん、だっけ？ 子供を亡くしたあんたならそう思うだろ？ 何も悪くない赤ん坊がどうして死ななきゃなんないんだって。自分の方が死ねば良かったのになって、そう思った筈だ。……俺はつくづく神様って奴を恨むよ。この世界の全てを神が動かしているのなら、そいつは神じゃ無い。死神だよ」

そのまま何も言わなくなった森口に、私はそれ以上話しかける事は出来なかった。連絡先を書いた紙だけを残し、私は湯川荘から早々に立ち去った。

森口も、悪意があってボールペンに毒を塗る様な人間では無い事は確かめられた。磯部を殺そうとしてわざと机に毒のついたボールペンを残した可能性も一瞬頭に浮かんだが、それも全て彼の涙にかき消されてしまった。

私は一体何のために黎の死の真相を探っているのだろう。神への抵抗か？ それとも、この行為も又、神のシナリオに沿って行動しているだけなのか？ 操られている者はいっだって自分が操られている事など気付いていない。マリオネットの様に。

伊織と話したくなった。しかし先程電話したばかりなのに、もう一度電話するのも憚られる。どうしようかと携帯電話の液晶画面をぼうつと見つめていると、突然着信音が鳴り始めた。

「もしもし」

「高杉さん？ 俺。森口だけど……」

彼の声は少し興奮気味だった。

「どうしたの？」

「たった今、思い出したんだ。あの日唯一あのボールペンで受取書にサインをした客が居る。フグ料理屋だ。店の名前は『桐谷』」

6 桐谷

森口に詳しい場所を教えてもらい、私はタクシーでその店に向かった。グルメ雑誌に紹

介されるほど有名な店らしいが、その系統の雑誌を私は立ち読みすらした事が無い。

店構えは思ったほど大した事は無かった。「フグ料理」と聞いて大層なイメージを勝手に抱いていただけなのだ、少し拍子抜けした。近所の飲み屋と大差の無い、小さな店だった。「フグ桐谷」と書かれた暖簾のれんをくぐり、私は戸を開いた。

「あつ、すいません、まだ準備中なんですよ」

カウンターの中から、店主の申し訳無きような声が飛んで来る。ここが真相の終着点なのかも知れないと思うと、私の鼓動が高まる。

「あの、この店のご主人さんですよね？」

「そうですが……」主人はでっぷりと太った、丸顔の男だった。

「少しお話を伺いたいんですが」

「取材ですか？」

「まあ、その様な物です」

店主は魚を捌く手を止め、タオルで手を拭う。見た所、今捌いているのはフグでは無く、鯛の様だ。

「冬が旬のフグが、夏でも食べられるんですね？」

「と、思うでしょう？　へへ、実は夏が旬のフグもあるんですよ」

店主は鼻を鳴らし、気前よく喋り始めた。「シロサバフグって言うんですけどね。下関から産地直送して貰ってるんです。……今日は残念ながら、入ってないんですけど。その代わり六時頃にお越しになれば、一番に鯛のお造りを御馳走しますよ。ウチはフグ料理屋ですが、鯛にも自信があるんです」

「二週間前の花火大会の日にも、そのフグは入っていたんですか？」

「ええ。あの日は特に賑わいましたねえ。ここからでも花火が見られるんで、花より団子、花火よりフグって感じででしょうか」

かなり気さくな人柄の様だ。そんな彼の気を悪くさせてはいけないので、私はそれとなく森口の事を尋ねる事にした。

「ちよつと変な事を訊きますが、その花火大会の日、宅配便が届きませんでしたか？」

「あれ、何で知ってるんです？」店主は目を丸くする。

「その時の状況を詳しく教えて頂けませんか？」

「本当に変な事訊くね。まるで探偵みたいだなあ」

店主はウーンと唸ってから、「本来ならそういった荷物を受け取るのは裏口で、カミさんの役目なんですけどね。あいつ息子達を連れてさつさと花火大会に出て行っちゃまいやがったんですよ。つまり裏口に呼び掛けただけど誰も居ない。仕方なく宅配業者が店の方に回って、ご覧の通り板場に立って切り盛りしてるのは大将の俺しか居ないんで、俺が荷物を受け取りましたよ」

「受取書に印鑑を押したんですね？」

「いやいや、店にハンコなんか置いてないよ。宅配の兄ちゃんから借りたボールペンを使ってサインしたっけな」

「その時はフグを捌いていたんですか？」

「ああ、そうだね」

これで完全に繋がった。店主がフグを捌いている最中に森口が宅配便を運んで来た。印

鑑が無いのでボールペンを貸し、フグの毒が付着した。後は森口から磯部へ、磯部から黎へと毒がリレーし、不運にも息子は死んでしまったという訳だ。

しかし――。

注意力散漫なこの店主を恨む気にはなれないが、私にはまだこれが真相なのだという実感が湧かなかった。例えば花火大会さえ無ければ、裏口には店主夫人が居て、受取書には印鑑が押され、黎は死ぬ事は無かった。例えばあの朝ドラッグ撲滅キャンペーンをやつてなければ、森口がボールペンを受け取らず、鉛筆を使うなどして、磯部の目に留まる事も無かったのかも知れない。そうすればこれも又、黎が死ぬ事は無かった。

この紙一重にして最悪の結果に繋がってしまった奇妙な連鎖は一体何だ？ これらが全て偶然の産物だと言えるのか？

「その時届いた宅配便は、一体何だったんですか？」

「確か、お菓子の詰め合わせセットだったっけな。飼い主からのお礼の品で」

「飼い主？」私は首を傾げる。

「ウチの庭にノラ猫が住み着いていたんですけどね。おそらく魚目当てに寄って来たんでしょうが、そいつが実は飼い猫で、飼い主がずっと探していた血統書付きの奴だったんだそうです。アメリカンシヨ、シヨ……」

「アメリカンシヨトヘアー？」

「ええ、ええ、そんな種類の。魚料理屋と猫は天敵なもので、危うく追っ払っちゃう所でしたよ」

「しかし……よく追ひ払っちゃう前に、飼い主が探している事が分かりましたね」

「ええ。本当ギリギリでした。ウチの店のホームページを作ってくれてる会社の人が、猫探しのホームページも手掛ける事になった様で、その猫もしかしたら、と教えてくれたんですよ。会社の名前は、株式会社インパ……インパク……」

「インパクト？」

「ええ。それです」

7 関

フグ桐谷の店主に聞いた住所に目的の会社が無かったため、かつがれたと思つてしまつたが、それは間違いである事に気付いた。それもその筈。目的のウェブデザイン会社は「インパクト」とカタカナで表記されている訳では無く、「印白塔」という当て字で無理矢理漢字表記がされていたのだ。その会社名の方がインパクトがあるだろう、とでも突っ込んで欲しいのだろうか。実に下らない。

私の自宅にもパソコンがあるが、インターネットは毎日一時間嗜む程度なので、フグ桐谷のホームページはおろか、その猫探しのサイトすらもアクセスした事が無い。そもそも最初からグルメ情報もペット情報も、私の行動範囲内には存在しないが。

二階建ての小さな建物の、二階部分がオフィスルームになっている様だ。一階はガレージ。セルシオやアンフィニなどの高級車が停められていて、何となく嫌味たらしさを感じる。それとも、そう思う私の方が捻くれているだけだろうか？

私は螺旋階段で二階に上がり、オフィスのドアを押し開けた。パソコンが数台置

かれた八畳ほどの部屋は、静まり返っていた。誰も居ないのか？ 私は「すみません」と奥に向かって大きな声を掛けると、入り口のすぐ傍からバタツと音がした。

驚いてそちらに目を向けると、そこにはソファアがあり、異様な髪（確かドレッドヘア）と言うやつだ）の男が、むっくりと身体を起こしている所だった。

「あ、いらっしやーい」

男は眠そうな目で私に微笑みかける。一応ネクタイを着用していたので、変質者では無さそうだ。

「あの、ここ本当に……ウェブデザインの会社？」私は恐る恐る尋ねる。

「そうですよ。もしかしてお客さん？」男は目をぱちくりさせる。

「いえ……ちよつとお話を」

「社長は外出してますけど、まあ、あいつは別にいいです。ああ、いや、そういう訳にはいかないか……」

「あの……」

「失礼しました。私、専務の関丈史せきただけしと申します」

関という男はポケットからサツと名刺を差し出した。真つ黒な名刺に白いフォントで刻まれた関丈史の文字。まるでホストクラブの様だ。

「こんな頭をしていますがみません。ちよつとした罰ゲームなんですよ」

むしろ私の方が罰ゲームを受けている気分だが、とりあえず今はこの変な男に話を聞く他は無さそうだった。

「それで、どの様なサイト制作をお望みですか？ 商用のページは大歓迎です。基本的には成功報酬制なんで、私共の作ったホームページでお店が儲かった時に、その中から幾らかのマージンを頂戴するといった形式を取っています。つまり初期コストは僅少です」

「いえ、仕事の依頼では無くて……。御社の作ったホームページについて、幾つか話を訊きたいと」

「はい。何でしょう」

「フグ料理の桐谷さんから聞いたんですけど、猫探しのホームページを最近手掛ける事になったとか？」

「そうです。ウチの仕事です」関は急に真面目な顔になった。「元々俺、いや、私のアイデアなんですけど、迷い込んで来た猫を、本当は飼い主が居るのにノラ猫だと思って自分の家の飼い猫にしてしまう事も案外多いと思うんですよ。そこで、地域や種類別に行方不明なペットを検索出来るサイトを起ち上げました。こうすれば、ノラ猫が迷い込んで来た時に『もしかして』って感じてこのサイトで検索をかければ、実はそれが行方不明の猫なんだなど分かるって寸法です」

「なるほど」

「最初は単なるペット探しの情報を掲載するだけのしょぼいサイトだったんですが、今回のリニューアルにより、アクセス数は急増しました。実に有り難い。でもここまでヒットしたのは、実はある一人の飼い主のおかげなんですよ。聞きたいですか？」

こちらの訊きたい事がなかなか訊けずじまいだが、彼は喋りたくてうずうずしていそうだったので、私は黙って頷いた。

「猫を見つけた人には、何と百万円を進呈するという応募を出したんです」

「百万円？」さすがの私もこれには驚いた。

「資産家の飼い猫だったんだそうですね。一般人の我々には絶対に真似出来ないっすよね」
関は楽しそうに言う。「いやあ面白かったですよ。この応募がサイトに掲載された途端、色んな電子掲示板にその情報が載って、サーバが一気にパンクしました。そこでそのサイトを管理していた愛猫サークルの人がウチに泣きついて来ましてね。何とかしてくれって……。それで慌ててサーバを強化し、ホームページにこのシステムを導入するきっかけになったという訳です。結局無事その猫は見つかって、見つけた人には本当に百万円が支払われました。……飼い猫に百万円の報奨金を掛けるぐらいなら家から出すなよ、って突っ込みたい所でしょうけどね、実は不可抗力だったんだそうですね」

「不可抗力？ どういう事ですか？」

「その資産家の隣の家が火事で燃えたんだそうですね。猫が遊んでいた庭に飛び火しそうな勢いだったので、慌てて逃がしてしまっただけ」

「まただ。不可解な不幸の連鎖。その家が火事になれば、資産家の猫は逃げなかった。猫が逃げなければその猫探し検索のサイトは出来ず、宅配便が桐谷に届く事も無かったのだ。そして――。」

ここまで来ると、私はこの連鎖の根本は一体誰なのか、あるいは何処なのか、どうしても確かめずには居られなくなった。

「その資産家の方の家、宜しければ教えて頂きたいんですけど」

「いや……あいにく、そこまでは知りません。でもサイトを管理している愛猫サークルの西川なら、分かるかと」

「ではその西川さんの住所を教えてくださいませんか？」

「いいですよ」

関は立ち上がって、デスクの上に置かれた手帳をめくり始める。「ところで……貴女のお名前、伺ってませんでしたよね」

「私は、高杉と言います」

「いいお名前ですね」

「そうですね」

「少なくとも安杉よりはずっといい」

住所を伺って早々に退散しようと思っただが、関は西川というその愛猫サークルの部長に連絡を取ってくれると言う。そして、車で送ってくれる事になった。

おかしな男だが、彼も又、悪い人では無さそうだ。私が何故その資産家に会おうとしているのか、その理由を全く訊いて来なかった事も少し有り難かった。

車に乗り込んだ時、彼は「ほい、どうぞ」と缶コーヒーを渡してくれた。よく冷えている。そう言えば自分がカジマ運輸で出されたお茶以外、今日は何も口にしていない事に気付く。空腹感すら忘れるほど、この神のシナリオを解くのに夢中になっていたという事だ。

「猫がお好きですか？」セルシオが発進するや否や、運転席で関が尋ねた。

「嫌いじゃありませんけど、飼おうとまでは思わないかな」

「俺も同感」彼の一人称が唐突に変わる。「人も動物も自由が一番っすよ」

私は少し笑った。

「面白い人ね。関さんって」

「うーん……それは良くない傾向だな」

「何が？」

「レディーから面白い人って言われるの、苦手です。昔振られた相手からそう言われた事があって、少々トラウマに」

「そう？ そう言われたいたがために、そんな頭をしているのかと思った」

「イケてませんか？」

「あまり」

「うーん」関はハンドルを切りながら苦笑いを浮かべる。「失礼ですが高杉さんは、おいくつですか？」

「三十二。今年の秋で三十三かな」

「えっ！ 全然そうは見えない。どう見ても二十代前半！」関は派手に驚く。

「年齢を訊いてからそれを言うのは、説得力が無いと思うわ」

「ちなみに俺はいくつに見えます？」

「四十」

私が即答すると、それが正解なのか間違いなのか分からないほど彼は微妙な表情になった。答えを教えてくださいと見ると、凶星なのかも知れない。

「……失礼ついでに、高杉さんは独身ですか？」

「今は」

「つまり、昔は結婚されてた？」

「本当に失礼な人ね」私は微笑んだ。「そう言う関さんはどうなんですか」

「生涯独身を通すつもりですよ。日本が一夫多妻制を認めない限りは」

「一人の女を愛せない性格？」

「いや、まあ……そう言う訳じゃ無いんですけどね。ただ、これだけ社会が法律法律でがんじがらめなのに、恋愛ぐらい自由にさせてくれないんじゃないかって思うんですよ。残り数十年しか無い命なんだから、その間に多くの恋愛を経験したい。いつそ結婚とか離婚とか、そんな制度自体無くなってしまえばいいのに。この世界へのささやかなる反発です」

「神への反発？」

「かも知れないっすね」関は大きく頷いた。「しかし不貞を極端に嫌うキリストだって、愛人が居たそうですよ。そしてその愛人も娼婦だったとか。つまり神によってこの世界が創られた時から、恋愛は自由で無くちゃおかしいんです」

8 西川

街は黄昏色に染まりつつあった。

閑静な住宅地の中にひっそりと佇む、古びたマンションの駐車場に車が入ってゆく。もしかして関の自宅にでも連れ込まれるのではと一瞬びっくりしたが、その二階の二〇三号室に「愛猫サークル」と丸文字で書かれたプレートがドアに貼り付けられたのを見て、私は思わず胸を撫で下ろす。

関がインターホンを鳴らすと、自分は猫を愛していますからと言わんばかりに、小さな三

毛猫を肩に乗せた長身の男が姿を見せた。学生風で、私や関よりはずっと若い。「彼が西川です」と関が紹介する。

「高杉と申します。少しお話を伺わせて頂けますか？」

「うわあ、取材ですか？」西川は目を輝かせながら声を上げる。

「似た様な物です」

本当は全然違うのだが、愛猫サークルに来てしまった以上、いきなり資産家の話を切り出すのもどうかと思い、私はなるべく差し障りの無い質問から尋ねてゆく事にした。

部屋に招き入れられると、リビングにはさらに四匹ほど、それぞれ色違いの猫が固まって寝そべっている。西川の肩に乗っている三毛猫以外のどの猫も雑種の様だったが、毛並みが綺麗で、丁寧に手入れがされているのが一目で分かる。

「マンションなのに猫を飼えるんですか？」私は訊いた。

「はい。犬は駄目なんですけどね」西川は三毛猫を下ろしながら答える。「ま、適当にお掛け下さい」

西川は床に座布団を二枚並べ、私と関はそれに腰掛ける。リビングを見渡すと、パソコンデスクにパソコンが一台置かれているだけで、食卓もタンスも無く、些か殺風景だった。「幸いな事に人間が快適に感じる温度と、猫が快適に感じる温度は同じなんです。あと、パソコンも」

「サークルという事は、他にもメンバーが？」

「人間は僕一人です」西川はうっとりとした目つきで猫を眺めながら言った。「この三毛猫が広報部長のサツキ。そっちの白いのが代表補佐のナナ。後は平社員なので、左からヒライチ、ヒラジ、ヒラゾウです」

ふとヒラジが立ち上がり、私の膝の上にちよこんと乗った。

「可愛いわね」私はヒラジを優しく撫でる。

「俺の上には絶対来ないんだよな」関が面白く無さそうに言う。

「関先輩はそんな頭してるからですよ」

「そうか？ 最高にイケてると思うけどなあ……」

こうしてヒラジを抱いていると、あの日私の腕の中で逝ってしまった黎の事を思い出す。幸村久美には「もし又子供を産む事があったら」と言ったが、きっともう子供を産む事は無いだろうと私は思っていた。不運な連鎖で、又子供を死なせてしまうのが怖い。死神の操るこの世界に生を与える事が怖い。見えない恐怖に怯え、新しい命を宿す勇気の無い私は、久美よりもずっとずっと弱い人間かも知れない。

「ところで、猫探しのホームページがヒットするきっかけになっただけで言う資産家の方について、ちょっと教えて頂きたいんです」

私は頃合いを見計らって切り出した。

「ああ、神代さんの事ですね」西川はヒラゾウを抱えてから話し始める。「僕は直接の知り合いって訳じゃ無いんですよ。その人は神代亀男さんと言うお爺さんで、五年ほど前に奥さんを亡くされてからは、ずっと黒猫の実亜子ちゃんを肉親の様に大切に育てて来ました。しかし三ヶ月ほど前、隣の住人が起こした火事に巻き込まれ、神代さんの家に燃え移ってしまったんです。神代さんは足が悪いのですぐに外に逃げる事が出来ません。それでもどうにかして実亜子ちゃんだけは逃がす事が出来ました。……幸い大事には至らず火は消し

止められました。が、実亜子ちゃんは一週間経っても二週間経っても一向に帰って来ない。そこで神代さんは、街のあちこちに実亜子ちゃんを見つけてくれた方には百万円を与える、というポスターを貼りました。それを偶然見つけた僕が、情報を我が愛猫サークルのホームページに掲載して呼び掛けてみようって話になった訳です」

「アクセス数は凄かったそうですね」

「何と言っても百万円ですからね。一家総出で猫探しを始めた家も何軒かあったそうですよ。火事から二ヶ月ほど経って、実亜子ちゃんを見つけてくれたのは小学二年生ぐらいの女の子でした。学校の帰り道に拾って、体育倉庫の中でこっそり育てていたんだそうですよ。家に持って帰るとママに叱られるからって」

「つまり百万円を勝ち取ったのは、欲の無い純粋な子供って訳だ」

関はフンと鼻を鳴らした。「おとぎ話みたいだな」

「そして実亜子ちゃんは無事元気なまま神代さんの元に届けられて、めでたしめでたし、です」

「その猫、是非見てみたいわ。神代さんの住所を教えてくださいませんか？」

「はい。いいですよ。ちょっと待って下さいね」

西川は鼻歌を歌いながら、パソコンを起動させる。そこに記録させてあるらしい。

「じゃあ又、俺が送って行きましょうか」関が訊いた。

「いいんですか？」

「勿論。どうせ暇なんだし」

「あのお、ずっと気になってたんですけど」西川が横から言う。「関先輩と高杉さんって、どういこうご関係なんですか？」

「ちっちゃ、世の中には一言で説明出来ない関係もあるのだよ、西川君」

関がニヤニヤしながら言う。私はそんな彼を睨みながら、黙り込んだ。

9 実亜子

神代亀男の邸宅は、平安時代のお屋敷の様だった。中庭には錦鯉の泳ぐ大きな池があり、庭に植えられた数本の松の木も見事に盛っている。縁側の長い廊下には、十二単を羽織った当時の美女がしずしずと歩く姿が簡単に目に浮かぶ。

神代はただっ広いこの屋敷に使用人も雇わず一人で住んでいるのだと言う。それにしても廊下は埃一つと落ちていない、美しいものだった。

「何せ掃除以外やる事が無いものでな」

私を居間へと案内しながら、神代はからりと笑う。つまり充実した余生を送っているという訳だ。

「儂の自慢の実亜子を是非見たいと聞いて、今夜は久しぶりに物凄く気分がええ。何なら泊まって行きなさい」

「いえ……そこまでは」

私は慌てて手を振る。陽は既に落ちていた。関丈史は彼女とディナーの約束があると言って帰ってしまったが、この家は私のマンションと割と近いので、徒歩でも帰れる。

「お隣の火事がこちらまで燃え移ったと聞きましたが、大丈夫でしたか？」

「なんのなんの。瓦屋根の一部と庭の松を一本焼いた程度や。怪我も無かったし、実亜子も無事戻って来た事だし、何の心配も要らん。火事を起こした家は全焼やがな」

「原因は何だったんですか？」

「ちよっとした子供の不注意でな……。それより実亜子が見当たらん。どこで遊んでるんやら。座って待ってなさい。ちと探してくらあ」

私を居間に残し、おうい実亜子や、と声を上げながら老人は去って行った。今は実亜子よりも、その事故の方を優先して聞きたい気分だった。子供が火事を起こす事になった原因は一体何だろう。そこがこの長い連鎖の出発点なのだろうか。

「見つからん」五分ほどして、神代が戻って来た。「もしかしたら向かいの堀川さんの所かも知れん。ちようど夕飯時やから……。すまんけど、もう少し待っててくれんか」

「はあ……」猫が見つかるまで帰して貰え無そうだ。

その時、携帯電話が鳴った。画面表示を見ると先ほど森口文也から掛かってきた番号と同じだった。

「もしもし」

「俺、森口。さっきのフグの件……。どうなったかって思っ」

「何度も言う様に、もしボールペンに毒が付いていたとしてもさ、それは貴方のせいじゃ無いわよ。もう気にしないで」

私は溜息混じりに軽くそう言うと、

「何だよそれ……。今更気にするななんて無茶言うなよっ！」

森口は突然哀しげに怒鳴った。「元はと言えばあんたが訪ねて来なきゃ……。あんたがペンにフグの毒がついてたかもなんて言わなきゃ、気にしなかったんだ！」

私には返す言葉が無かった。

森口がそこまで思い詰めているとも知らずに、私は……。

「……やっぱり、あのペンには毒が付いていたんだな？」

「……………」

「……分かった。もういい」

「待って、お願い」

私は慌てて声を掛ける。「もうすぐ全てが分かる。貴方は全然関係無いかも知れない。だからそんなに思い詰めないで……」

「……何を言ってる」森口の笑い声が聞こえた。「もう全部分かってんじゃねえかよ。あんたがどこで何しよう、ペンに毒が付いてたって事実は何一つ変わらないんだ。俺があんたの息子を殺したんだ。俺が……」

「違う！ 貴方が殺したんじゃない！」

その叫びも空しく、電話は既に切れていた。折り返し彼に電話を試みたが、電源が切られていた。こうしては居られない。私が居間を出ようとした時、神代が黒猫を抱いて戻って来た。

「お待たせした。これが自慢の実亜子や」

神代は私に黒猫を抱かせる。「どうや？ 抱き心地は？」

「ええ……」私の心中はそれどころでは無かった。

「この猫が行方不明になった時な、ほんまは三百万円の報奨金をかけようと思ってたんよ。」

実亜子にはそれだけの価値がある。ま、若い人には分からんやろけど」

「いえ、分かります……」

「あの日は隣の娘の誕生日やったんや」

老人は庭の方を見つめる。「その娘の親父が心臓外科医らしいねんけどな、誕生日の夜には早く帰る早く帰るって口が酸っぱくなるほど約束しとったのに、突然急患が入ったとかで、親父はすぐには帰られへん様になってしもたんやって。……娘は一人で誕生日を祝おう思って、ケーキにロウソクを立てて、火をつけたんやそうや。それが倒れて……大惨事や。……お袋を早くに亡くしたあの娘が、親父と二人きりで誕生日を過ごそうと思っとったその子の気持ち、儂にはよお分かるよ。だから儂はその子を責めたり出来へん。家も松も又すぐに作り直せるけど、心が壊れたら永久に作り直す事は出来へんのやから」

神代は屈託のない笑顔を浮かべていた。

私は暫く黒猫を眺めてから神代に礼を言い、屋敷を小走りに出た。森口の携帯電話に何度か電話を掛けてみたが、一向に電源が入る様子は無い。念の為に彼の自宅にも行ってみたが、鍵が掛かっていて、中に人が居る気配も無かった。明日もう一度来てみよう。そう思い、私は帰宅した。

これからどうしよう。ここまで来たのだから最後までやり遂げようという想いと、森口の言う通り私の行動にはもう何の意味も無いのだという想いが交錯し、ジレンマを生み出していた。こんな時彼女なら……伊織なら、どうするだろう。

私は本棚から伊織のデビュー作「空谷の登音くうこく きようおん」を手に取り、読み始めた。その恋愛小説に進むべき道が書かれてはいないだろうけれど、きっと彼女だけが持つ強さを私に与えてくれるはずだと、心に強く願いながら。

10 中野

浅い眠りだと思っていた。

携帯電話の画面に表示された時刻を見て正午を過ぎている事に気付き、信じられないという想いを身に纏ったまま身体を起こした。子供の頃から、成績は悪くとも寝坊だけはした事が無いのが唯一の自慢だったのに。

相変わらず空腹感は湧かず、ひたすら水分だけを喉に流し込んでいる状態が続いていた。しかし葬儀の後に買ったミネラルウォーターのペットボトルは、まだ三本も余っている。

私はパソコンの電源を入れ、インターネットに接続する。新聞を取っていないので、ポータルサイトでニュースの見出しを確認する事が、毎朝の日課となっていた。

殺伐とした記事は無く、私の周囲の世界は平和だった。

接続ついでに、私はふと昨日の猫探しのホームページが見たくなった。関から聞いていたアドレスを入力し、サイトにアクセスする。行方不明中の犬猫の情報の他、神代亀男の記事もそこにはあった。実亜子が居なくなってしまうた日付が五月十五日というのを見て、何となくその日付に都内で起こったニュースを検索したくなった。火事を起こした娘の父親が急患で帰れなくなったという事は、もしかしたら大きな事故か事件があったのかも知れないと思ったからだ。

ニュースサイトに戻り、その日付で検索を掛けてみる。五月十五日の午後六時半頃、ペー

スメーカーの誤作動で倒れたお婆さんが救急車で運ばれた、という記事が見つかった。移送先の「T中央病院」というその病院がその父親の勤め先かどうかは分からないが、神代邸から車で十五分程度の距離のため、可能性は高い。

詳細記事にアクセスしてみる。高円寺の大通り沿いにある宝石店のショーウィンドウが何者かに割られ、その光景を見ようと野次馬達が一斉に押し寄せ携帯電話を使用し始めたため、偶然近くを散歩中だったお婆さんの心臓のペースメーカーが異常を来したのだと言う。ウィンドウを割った者は不明。店内にはラムネ（瓶の口にビー玉が詰められた炭酸飲料の方だろう）の瓶が投げ込まれていた。だが犯人が侵入した形跡は無く、何も盗まれてはいなかった事から、警察は悪質な悪戯と見ている。又、現場から慌てて逃げ去ってゆく女兒を目撃したという話もあるらしい。

そのニュースの下には携帯電話とペースメーカーに関する簡単な注意書きが書かれていた。たとえ通話やメール送受信をしていなくても、携帯電話の電源が入っているだけで、基地局にその電話の存在を知らせるため定期的に信号が送られるため、強い電波を生じる。宝石強盗だと思いつめた野次馬達は、携帯電話で現場の写真を撮影したり、知人に電話で知らせたりもしていた事だろう。その近辺の電磁波は、通りすがりのお婆さんのペースメーカーを狂わせるのに十分な量だったに違いない。

（ラムネの瓶が投げ込まれたりしなければ、そのお婆さんは病院に運ばれなかった——）
火事を起こした娘の父親は、神代の話では心臓外科医だ。救急車で運ばれたお婆さんのオペを行い、そのせいで家に帰れなくなったとしたら……。

（ラムネ……女兒……）
いつしかマウスを握る私の手が震えていた。私はラムネを好む少女をたった一人だけ知っていたからだ。あれは三ヶ月ぐらい前、黎を連れて伊織の家に遊びに行った時。

——懐かしいわね、ラムネって今でも売ってるんだ？

興味深く尋ねる私。なみきはその少女の隣でオレンジジュースを飲んでいる。ラムネの瓶を持っているのは……。

——近くの駄菓子屋さんに。

美味しそうにラムネを飲む口数の少ない彼女。それは、ユッコだった。

（……そんな筈……そんな筈は無い）

私はぶるぶると首を振る。駄菓子屋でラムネを買う女の子は彼女以外にも沢山居るはずだ。ユッコでは無い。あの娘がこの一連の連鎖を起こした張本人である筈が無い。私は伊織のマンション付近の地図を検索し、「中野屋^{なかのや}」という駄菓子店を一軒見つけた。身支度を調べ、すぐにその店へと向かった。

都市開発が進み、街からは次々と古びた建物が消えてゆく。それに抵抗をするかの様に、高級住宅街の片隅には、駄菓子店や豆腐店など昭和初期に建てられたと思われる店が数軒建ち並んでいた。

中野屋の前では、丸眼鏡をかけたお爺さんが、のんびりと椅子に腰掛け日向ぼっこをしていた。私と目が合うと彼は「いらっしやい」と微笑みかけてきた。このお爺さんが店主なのだろう。

「ラムネを、下さい」

誰かに操られているかの様に、私の口はそう呟いていた。

「あいよ。……美人さんだね。もしかして、ユッコちゃんのお母さんかい？」
「えっ」

「ありや、違ったか。この辺でラムネを買っていく様な子は、あの子ぐらいしか居ないからねえ。……六十円だよ」

私は十円玉で代金を支払うと、店主はクーラーボックスから瓶を一本取り出す。森永のラムネだった。

「ラムネの瓶の口にはどうして硝子玉が詰められているか、知ってるかい？」

店主が尋ねた。子供の頃から疑問に感じていた事だ。「栓をするためだよ。炭酸飲料がまだまだ普及していなかった頃、炭酸の圧力のせいで栓がパーンと飛んでしまったりして、なかなか上手く栓をする事が出来ずに居た。そこで考えられた方法がその硝子玉だ。玉を内からの圧力で逆に押し上げてやる事で、隙間から液体が漏れるのを完全に防いだという訳だ。実に純粋な理由だろう」

私はラムネの瓶を開ける。子供の頃に一度か二度飲んだきりだ。このビー玉が動いて飲み口を塞いでしまい、うまく飲めなかった記憶がある。

「ふふ、ユッコはな」

当時と同じ様に悪戦苦闘を繰り返していると、店主が微笑みながら言った。「ほら、瓶の真ん中辺りに、変に窪んでいる部分があるだろう？ 瓶を傾けて、そこにうまく玉を詰め込んでやるんだ。そうすればもう玉は動かなくなる」

私は言われた通りにやってみた。ビー玉はその位置に填り、スムーズに飲める様になった。懐かしい味が喉を潤し始める。この味も、この感動も、神は味わう事は出来ないのだ。

「お、噂をすれば、ユッコちゃんだ」

店主は立ち上がった。「もう学校は終わったのかい？」

私は思わず振り返る。紅いランドセルを背負ったピンクのTシャツのユッコが、黙って私を見上げていた。

「こんにちは」

彼女は珍しく私に話し掛け、そして微笑んだ。「やっと見つけたんだね、つかささん」

11 由希子

私とユッコは並んで歩く。彼女の名前は由希子ゆきこと言うらしい。

やっと見つけた、由希子はさつき確かにそう言った。意味が解らなかった。だが何故かその言葉の意味を確かめる事が出来なくて、ただ無言で歩き続けるだけだった。

「何が起ったのか、もう分かったでしょ」

暫く歩いた時、ラムネを飲み終えた由希子が唐突に大人びた口調で話し始めた。

「何が？」

「黎君がどうして死んだのか」

由希子は公園へと駆けてゆく。私は慌ててその後を追う。

そこには他に誰も居なかった。由希子はいつの間にかベンチに座っていて、私一人分の席を空けてくれている。周辺は恐ろしく静まりかえっている。虫の鳴き声すら聞こえなかった。二人の時間を邪魔してはいけぬと、遠慮しているかの様に。

「宝石屋さんにラムネの瓶を投げ込んだのはあたしだよ」

私が由希子の隣に腰掛けた時、彼女はあっさりと言った。

「……何のために、そんな事を？」

「決まってるじゃん。最終的には、黎君を殺すため」

「よく意味が……解らないわ」

「鈍いよ、つかささん。全部説明されなきゃ、解らない？」

由希子は口を尖らせる。私はゆっくりと頷いた。

「だからね、これ、全部計画していた事なんだよ。ラムネの瓶をあそこに投げれば、どういう事になるのか、あたし全部読んでたもん。野村のお婆ちゃんね、いつも同じ時間にあの宝石屋さんの前を通るの。だからお婆ちゃんが来る少し前に、あその硝子を割ったんだ。大人の人達って皆ケータイ持ってるでしょ？ 騒ぎになれば大人達が大勢集まってあの店の前でケータイを使い始めるって思ってたよ。ケータイにはお婆ちゃんの心臓にくっついてる何かって機械をおかしくさせる電磁波って言うのがあるんだよね？ テレビで言ってた」

「そのお婆さんをユッコちゃんが殺そうとしてたって言うの……？ まさかそんな……」

「ウザイのよ、あのお婆ちゃん。あたしが学校の帰りに道草くつてあの駄菓子屋さんでラムネ買ってたら、子供が買い食いなんかするんじゃないって酷く怒るの。あたしの家まで怒鳴り込んできて、ママやパパを叱った事もあった。だからあんなお婆ちゃん、居なくなればいいのって、いつでも思ってた」

「子供が買い食いをしちゃいけないのは行儀が悪いからよ。それは昔から決まってる規則なの。私だってそんな風に育てられたわ。だからそのお婆さんの言う事の方が正しい。居なくなればいいなんて思っちゃ絶対に駄目よ」

「大人はいつも勝手。すぐ規則規則って言うけど、じゃあ大人達は社会の規則を皆しっかりと守ってるって言えるの？ 物を盗んだり、人を殺したり。子供のやる事よりずっとずっと悪い事をやってるじゃん」

「そういうルールを守らない愚かな人間にならない様に、貴方達子供は今の内に決められた事をしっかりと守らなくちゃいけないの」

「規則を守らない大人達が、規則で子供達を縛りつけるなんておかしいよ。子供は大人達には抵抗出来ないのに。これってただの弱い者いじめじゃん」

「全然違うわ。今の子供達から見ればそういう風に見えるかも知れないけど、貴女も大人になつたらきつと解るはず」

「ほーら、言うと思った。大人はいつも大人になれば分かるって逃げ道を用意してる。ずるいよね。別にいいけどさ。あたしはこれからあたしが思った通りに生きるし、つかささんとこんな話をするためにここに居るわけじゃ無いからね」

私はこの少女が怖くなった。これが八歳の女の子の言葉だとは思えない。彼女一人が狂っているのか、社会全体が狂っているのか。それとも私が異常なのだろうか――。

「どこまで話したっけ？ ああ、そうそう、お婆ちゃんの話までだよ」

由希子はにっこりと微笑む。「お婆ちゃんを乗せた救急車は、すぐ近くにあるT中央病院に行くしか無い。あの病院には心臓の手術を出来るお医者さんが一人しか居ないんだよ。鈴木さんって言って、うちのクラスのミカちゃんのお父さん」

「それも……読んでたつて言うの？」

「当然そうだよ。あの日はミカちゃんの誕生日だった。おっきなケーキを買って来たから、今晚お父さんと一緒にパーティーやるんだって、教室でいやとほど自慢してた。せつかくのバースデーなお父さんが帰って来なければ、ミカちゃんは一人でケーキにロウソクを立てるような子だつて知ってたから、こうしてお父さんが帰るのを邪魔してあげたの。……お父さんには別に恨みは無かったけど、ミカちゃんはあたしのお洋服を破ったもん。許せなかった。二年間一生懸命お小遣いを貯めて、やっと買った大事なお洋服だったのに」

「そんな事で……」私は絶句する。

「ロウソクの火で火事になったのは偶然だったけど、昔親に内緒でミカちゃんと一緒に花火をやった時にマッチの使い方がぎこちなかったから、確率としては高かったと思う。おまけにあの日は風も強かったし、お隣の神代さんの家にまで燃え移る事も簡単に予想がついたよ。」

神代さんの家には実亜子ちゃんつて可愛い猫を飼つてる事、駄菓子屋さんまで辿り着いたつかささんならもう知つてるよね？ あのお爺ちゃんは自分の命よりも猫を大事にする人だから、絶対表へと逃がすつて思つてた。

次の日あたしは実亜子ちゃんの行きそうな場所を探して、見つけたの。そして体育倉庫の段ボール箱の中に隠した。神代さんが百万円の報奨金を掛けて暫くするまで、そこで飼つてた。ずつと猫を飼つてみたいと思つてたんだよね。捨て猫を家に持つて帰つて来た時、ママに叱られた事があつたから、家では飼えないけど」

「じゃあもしかして……実亜子を神代さんに届けて百万円を貰つたのつて、貴女だったの？」

「そうだよ。別に百万円が欲しかった訳じゃ無いけど、ウチ結構家計苦しいらしいんだ。パパに渡したらすつごく喜んでくれたよ。あたしパパの事は大好きなんだ」

由希子は白い歯を見せながら、両腕を前に伸ばした。その幼い仕草は紛れもなく彼女が子供である事の証明だった。

「……火事の次の日にあたしが実亜子ちゃんを既に見つけていたにも関わらず、どうしてすぐに名乗りでなかったのか分かる？ 愛猫サークルの西川さんに話を持つて行くためだよ。猫が見つからなければ神代さんは猫探しにお金を掛ける。それが西川さんに伝わつて、愛猫サークルのホームページに載る。そう考えたから、ホームページにその情報が載るまで待つたつて訳。勿論、西川さんが猫探しに気付く様子が無ければ、あたしから直接西川さんにその情報を持つて行つてやろうと思つてたけど、その必要も無かつたみたい」

「どうして西川さんの事を知つていたの？」

「言つたでしょ。あたしずつと猫を飼つてみたいと思つてたつて。猫が好きなんだよ。だからちよくちよく愛猫サークルのホームページを覗いてる。」

行方不明の猫を見つけた人には百万円がプレゼントされるなんて夢みたいな話があるんだけど、載つていれば、欲ばりな大人達は皆そのページを見る。パパから聞いた事があるんだけど、沢山の人が一つのホームページに集中したら、サーバつて言う機械が故障する事があるんだつて。神代さんの事が書かれて三日も経つと、そのサーバつて機械が故障して、しばらく愛猫サークルのページが見られなかった。宝石店で硝子が割れた時、虫みたいに湧いて

来た野次馬みたい。大人って本当にバカだよ。

西川さんが毎日ホームページ上に載せている日記に、先輩にホームページ制作会社に勤務している人が居るからよくアドバイスを貰う、って書いてた事があったの。となると、サーバが故障したら、困った西川さんが相談するのは当然その先輩だよ。

日記にはその先輩が勤めてるって言う会社のホームページへのリンクが貼られていてね、その中にフグ桐谷のホームページを作った会社だって書かれてた。フグの体の内には毒が入ってるって学校の先生から聞いてたのを覚えて、これを利用して黎君を殺そうって思ったの」

「フグ桐谷から、黎の指に毒が付く事まで……全て計算して……？」

「難しかったよ。だってあたし、西川さんの先輩の居る会社の事も、フグ桐谷ってお店の事も全然知らなかったんだからね。……でもね、いい事を思い付いたの。近所でアメリカンシヨートへアーを飼っている人が居て、その猫を誘拐して、フグ桐谷の店の裏庭に放してやった。魚料理の店だけあって、猫は簡単に居着いちゃったみたい。

西川さんの先輩がフグ桐谷に行った時、あのお店の人から『猫が迷い込んで来た』って話をもしたら、今話題の猫探しのホームページの話をする事ぐらい誰でも分かるでしょ？ これであのアメリカンシヨートへアーも無事飼い主の元へ届けられる」

「でも……でも、あの宅配便は？ 花火大会の日にそんなタイミング良く、アメリカンシヨートへアーの飼い主がお礼の品を贈る事なんて、予想出来ないわ」
「甘いよ、つかささん。だってあの菓子折はあたしが贈ったんだもん」

由希子は小馬鹿にした様な目で私を見つめる。「コンビニで一番安い菓子折を買って、そのまま宅配便で贈ったの。配達時間の指定も出来るし、宅配便を贈ったのが本当に飼い主本人かなんて、いちいちお店の人は確認もしないでしょ？」

「桐谷さんが飼い主に直接、お礼の電話を入れるかも知れないじゃない」

「そんなの菓子折に一言、『お礼の電話は不要です』ってカードを入れておけば済むだけの話でしょ？ 頭使わなきゃ。いい歳した大人なんだから……」

桐谷さんがフグを捌き始める時間は、庭に猫を放した時なんか全部調べ済み。花火大会の日に宅配便を届けた理由ぐらいいは分かるでしょ？ あのお店に品物が届く時、いつも店の裏口で他の家族が受け取って、ハンコを押すんだよね。いつも裏口に居る家族が誰も居なくなる日は、花火大会しか無かったの。

配達のお兄ちゃんは裏口には誰も居ないと知って、お店の方に回る。そっちにはハンコは無いから、荷物の受け取りはサインをするしか無い。配達のお兄ちゃんが持つてるペンを使ってね」

「でもそのペンは、その配達の人が偶然その日の朝に貰った物よ」

「ペンの種類なんかどうでもいいよ。それに、フグ桐谷に品物を届けるのがカジマ運輸の南営業所の人であれば誰でも良かった。大切なのは受け取りにサインをした時に、ペンにフグの毒が付くというその事実だけ。ペンを事務所に持ち帰れば、後はお爺ちゃんの役目」

「お爺ちゃんって、まさか」

「あたしの苗字は磯部。磯部由希子だよ」

「そんな……」私は茫然自失になりかけていた。

「お爺ちゃんがカジマ運輸の南営業所で働いてる事も、つかささんは既に知ってるはずだ

よね。お爺ちゃんは机の上に置いてある物を何でも自分の物にする癖がある。ペンとか消しゴムとかホッチキスとか、文房具類は特にね」

「そうだとしても……事務所に持ち帰ったボールペンを、磯部さんが持って行く可能性は低いはずよ。その配達の人がずっと肌身離さず持っているかも知れない」

「あは、それは無いよ。だってカジマ運輸の作業服は、その日の仕事が終わったらクリーニングに出すんだよ。ポケットに入っているペンやメモ用紙なんかは全部外に出してから、回収に来たおばさんに服を渡すの。六時までの従業員はそのまま夜勤の人と交代して帰っちゃうから、机に放ったらかきにされているボールペンをお爺ちゃんが使いう可能性は高いよ」

「……黎は、たまたまその日にベビーシッターの人に連れられて、そこへ……」

「託児所に届いたおもちゃが、壊れていたからでしょ？」

私はもう何も言えなくなった。僅か八歳の少女に、ただ怯えていた。

「あの事務所に遊びに行った事は何度もあるよ。何と言ってもお爺ちゃんが働いているんだもんね。社会見学させてってお願いして、集荷の様子を見せてもらおう事なんかも簡単。長い長い夏休みだしね。」

花火大会の日の朝、つかささんの勤めてる雑貨店宛の荷物が沢山あったよね。それがあある日は決まってつかささんの帰りが遅くなる事もあたしは知ってるんだ。なみきちゃんだって知ってるよ。あの家でぺらぺらと喋りすぎなんだよ、つかささん。

その荷物を見た後、黎君の行ってる託児所宛の荷物もあったのに気付いて、それをわざと落として壊したの。荷物が届いても託児所その日の営業が終わらない限り、託児所の人は南営業所に荷物の返送には来ない。来るとすれば夜七時以降で、その人は百パーセント黎君を連れている。つかささんの元に送り届けるためにね。その時に赤ちゃん好きのお爺ちゃんが黎君の指に触るのも、あたしは分かっていた。

あたしの計画はこれで終わり。黎君には指を舐める癖があったもんね。フグの毒の付いたその指を舐めて、死んじゃったって訳」

「……えいっ」

私はようやく喉の底から言葉を絞り出す。「……どうして、黎を」

「なみきちゃんの家に、黎君を連れて遊びに来た事があったでしょ？　つかささん」

由希子の表情から笑顔が消え、鬱蒼とした顔で私を睨み付ける。「あの時、黎君、あたしの大事な熊のぬいぐるみをめちやくちゃんに壊したんだよ。覚えてるでしょ？　誕生日にパパに買ってもらった大事なぬいぐるみだった。お店に同じぬいぐるみは置いてないんだよ。ミカちゃんに破られたお洋服よりもずっとずっと大切な、そのぬいぐるみを……黎君は無邪気な顔で壊した」

「だからって……殺す事は無いじゃない！」

私は思わず叫んでいた。「どうしてそうなの？　ぬいぐるみよりも、人の命の方がずっと軽いって言うの？　そんなのおかしい。絶対おかしいわ。貴女は間違ってる。狂ってる。貴女の身の回りの物が傷つけられたら、その度に貴女は傷つけた人を排除していくの？　それが貴女のやり方？　どうして平気な顔をしてそんな残酷な事が出来るの？　私……貴女を許せない……」

「だったらどうするの？　あたしを殺すとか？」

由希子の顔に再び笑みが戻る。「そんな事は出来ないよね。それをやっちゃったら、つかささんはあたしと同じだもん。あとね、さっきあたしが話した事を全部警察に言っても、笑われるのがオチだよ。あたしは警察の人に何を訊かれても否定するし、周りから見れば全部偶然なんだもん。逆につかささんの方が頭がおかしいって変な目で見られると思うなあ」

私の瞳からポタポタと涙がこぼれ落ちる。肩を震わせ、拳を震わせ、目の前に居る少女に殺意のこもった目を向けても、この悪夢から解放される事は無かった。

「さてお腹が空いたからそろそろ帰るね。ママがおやつを作って待ってるの」

由希子はひよいと立ち上がる。「あ、そうそう。一つ言い忘れてた。……黎君がぬいぐるみを壊した時ね、つかささんは『ごめんね』って謝りながらあたしに千円札をくれたよね。宝石屋さんに投げつけたラムネは、そのお金で買ったんだよ」

黎を殺したのは私だった。

黎を殺したのは……私だったのだ。

エピローグ

私は通行人に笑われるのも構わず、泣き濡れた顔でふらふらとマンションへと戻って来た。真実を知るべきでは無かった。残酷な神のシナリオを暴こうとして、その罰が下ったのかも知れない。

もう何をする気も起こらなかった。生きる気力さえ失いかけていた。

自室に入った途端、唐突に目の前が真っ暗になり、私は床に崩れ落ちた。もうこのまま死んでしまいたい。この世界から抜け出してしまいたい――。

身体を起こした時、手がテレビのリモコンに触れ、電源が入ってしまった。

これも神の描いたシナリオ？

ワイドショーを放映していた。見覚えのあるアパートが映し出されていて、その前でアナウンサーがマイクを持って暗い表情で喋っている。

『正しくなったのは森口文也さん、二十四歳。自室の風呂場で手首を切って死んでいるのを、森口さんと同じ運送会社で勤務する女性従業員が発見し――』

私はテレビの電源を乱暴に切った。

床に転がっていたビールの缶を、テレビに向かって投げつける。

ガツン、という派手な音で跳ね返り、再び床へと転がった。

「あああああああああああああああああつ――」

自制が効かなかった。

喉が潰れてもいい。

血管が切れてもいい。

もうこの世界に居たくない。

呪われたこの世界から、一刻も早く逃げ出したい。

森口の元へ。そして黎の元へ。

*

これが、許し難い神の行いのすべて。

ここまでの内容は全て和樹のパソコンにも送ってやった。あの男が私の死を知っても鼻で笑う程度でしょうけど、少しでもショックを受けてくれる事を私は期待してる。

ごめんね伊織。私はこの記録を貴女にも送った後、一足先に行きます。貴女と出逢った頃は「お婆ちゃんになってもお互い親友で居ようね」なんて、約束していたのにな。

この事件の全てが磯部由希子たった一人によって仕組まれた物だなんて、貴女には信じられる？ 私はどうしてもそうは思えない。ミカちゃんという子かもし素直にお父さんの帰りを待っていたとしたら？ 神代さんの猫がもし自力で帰って来たとしたら？ 体育倉庫に隠して飼っていた猫が先生によって発見されたとしたら？ 磯部が別のペンで仕事をしていたとしたら？ 託児所のオーナーが、おもちゃが壊れている事に気付かなかつたら？ たった一つ事象が狂うだけで、あの子の言う通りには絶対にならなかつた。

だから私はこう思う。黎を殺すきっかけを与えてしまったのは私であり、黎がフグ毒を飲むに至るまで全てを操っていたのは由希子では無く、神様なのだ。

人はやっぱり神様に操られてるんだよ。そしてそれは私も貴女も逃れる事の出来ない現実。私はそれに気付いて怯えて生きてる。貴女はそれに気付いて楽しんで生きてる。もしかしたらこの違いが、命運を分けたのかも知れない。

私のイメージする神様は目には見えないけれど、この世界から私が消え、もう一つの世界に行ったら見えるかな。その世界で、黎や森口文也に会えるかな。

私達も又、何十年後かに、そこで再会出来るといいね。

さよなら伊織。今までありがとう。

空谷の聲音は、いつでも私の大切な宝物でした。

高杉つかさ

親友が逝つてから一週間が過ぎた。

北嶋伊織は彼女と彼女の最愛の息子が眠る墓標に三十分間の黙禱を捧げた後、凜とした表情で立ち上がり、ある男に電話を掛けた。一時間後に会う約束を取り付け、乗って来た車で北へと向かう。

ルームミラーに映る自分の姿を見て、また髪が伸びたなと伊織は思う。ずっとロングだった髪は夫と離婚後にバツサリと切ってしまった。切る事で新しい自分になれると信じていたからだ。しかし何も変わらない。むしろ失った物の方が多かったかも知れない。

——この世界の全てが神の作った物語だとしたら、ヒロインはきつと貴女。
親友の印象的なその言葉が、ふと心に蘇る。

物語のヒロインはいつだって苦手だった。自分の描いた小説でさえも、ヒロインだけは愛す事は出来ない。何故なら彼女達は皆、自分と似た部分を少しでも共有しているからだ。

青山のオフィス街の一角にあるカフェが待ち合わせ場所だった。伊織の方が五分ほど早

く到着し、その後すぐに目的の男が現れる。彼との面識は無かったが、顔はつかさに写真で見せて貰った事があるので、伊織の方から声を掛ける。

「鷺沼和樹さんですね」

伊織は笑顔を見せず、冷たい表情で問いかけた。

「じゃ、君がつかさの親友って言う、北嶋さん、ですか」

逆に和樹の方は笑顔だった。思ったよりも低姿勢だ。スーツにネクタイ姿。営業先から直接来たと思われる。彼はコーヒーを注文してから「で、何の用ですか」と尋ねた。

「無駄話をするつもりはありません。単刀直入に言います」

伊織は和樹を睨む。「黎君を殺したのは貴方ね」

和樹の眉間に一瞬皺が寄ったが、すぐに又笑顔に戻る。

「何を馬鹿な」

「黎君が亡くなった日の状況に関しては、つかさから全て聞きました」

「だったら知っている筈だろう。俺にはアリバイがある」

「本当は同僚の方が一人で行く筈だった出張に無理矢理便乗して、でしょう?」

伊織は抑揚の無い声で言う。「でもそのアリバイには何の意味も無いわ。貴方が直接黎君に毒を飲ませた訳じゃ無いもの。共犯者が居た。幸村久美さんという共犯者が」

「誰だい、その人」

「貴方がこれから再婚する相手です」

和樹は黙り込んで煙草に火をつける。その仕草が妙にぎこちなく、余裕そうな表情に見えて、かなりの動揺を受けているのは誰の目から見ても明らかだった。

「つかさとの離婚調停で、貴方は黎君に毎月多額の養育費を払う判決が下りてしまった。離婚後、不倫相手の幸村久美さんと結婚する事が既に決まっていたのに、彼女の連れ子二人の養育費にプラス黎君の養育費まではとも払う余裕が無かった。だから黎君を殺す事を思い付いたんでしょ?」

和樹は声を上げて笑い始めた。

「残念だけど全くの的外れだよ。つかさの遺書を見なかったのかい? あいつが死ぬ間際パソコンに遺した文章だよ。磯部由希子っていうどつかのガキが立てた壮大な計画だ。何ならそのガキに確認してみればいい」

「彼女は自分の計画のおかげで黎君が死んだのだと信じ込んでいるけれど、それだけは絶対であり得ないわ。何故なら森口さんから磯部さんに渡ったと言うそのボールペンには、フグ毒は一切付いていなかったんですから」

「馬鹿言え。毒が付いていたから黎が死んだんだよ。磯部由希子とかいうそのイカれたガキの爺さんが、毒の付いた手で黎に触ったせいだ。それともゴミ集積所を漁って、その問題のボールペンを見つけたとでも言うのかよ?」

「いいえ。でもそのボールペンには毒が付いていた筈が無いわ。たとえ桐谷の主人がフグを捌いていた手で、わざとベタバタにそのボールペンを握っていたとしてもね。何故ならそのお店で扱っている夏が旬のシロサバフグは、無毒性の魚だからです」

和樹の笑顔が引きつった笑いへと変わる。「なん、だと……?」

「日本で捕れるサバフグには、シロサバフグ、クロサバフグ、ドクサバフグの三種類が存在しますが、その中でもシロサバフグだけは体内のどこにも毒がありません。全てのフグ

にテトロドトキシシンが含まれていると貴方は思っていたんでしょけれど、シロサバフグは丸ごと食べたって死なないわ。桐谷さんにも確認を取りました。ボールペンの一件では注意力散漫だった訳では無く、最初から毒などどこにも無かったから、注意する必要すら無かっただけの事よ。

つまり黎君の指に毒を塗り込む事の出来る人間は限られている。つかさ以外で黎君を最後に触った人間、つまりベビーシッターの幸村久美さんです。つかさの遺書を読んで私はすぐにシロサバフグの毒性について調べた。無毒性だと分かった時、私は彼女を疑い始めた。動機だけがどうしても思い付かず、知り合いの警察関係者に調べて貰った所、彼女は夫と離婚し、再婚しようとしていた。その相手が鷺沼和樹さん」

伊織がそこまで説明した時、ウエイターがコーヒーを運んで来た。和樹はそれに手を付けようとせず、黙って伊織の表情を睨み続けている。

「由希子ちゃんが絡んでややこしい話になってしまったけれど、つかさが死ぬ事だけは既に貴方の中では決まっていたんでしょ？ 警察が自殺したつかさの部屋を捜索中、冷蔵庫に入っていた未開封のミネラルウォーターから、フグ毒が検出されました。それを飲んでつかさが死ねば、彼女が黎君を殺し自分も同じ毒で死んだ、すなわち無理心中だと警察に思わせる事が出来ます。」

勿論、つかさはそのミネラルウォーターを飲む前に浴室で手首を切って死んでしまったので、それに毒を入れたのは彼女自身である筈が無いんです。つかさがミネラルウォーターを買った日から彼女が浴室で自殺するまで、その部屋に入った人間は貴方しか居ない。つかさの最期の記録がそれを証明しています。

つかさの遺書を読んだ貴方は、由希子ちゃんの奇妙な計画や、彼女が自分から死んでくれた事に大喜びだったでしょう。でも彼女が自分なりの方法で自殺を決行してしまったため、貴方が毒を入れたミネラルウォーターは現場に残ったまま。それが貴方の誤算」

「はっ、君にどう言われようが、結果的につかさは自分で手首切って死んだんだろ？ だったら俺は殺人犯じゃ無いさ。黎の件だって、きつと久美が俺を気遣って単独で殺ったんだよ。俺は全く関係無い。警察にチクるならチクれよ。俺が黎を殺ったって言う証拠など、どこからも出ないだろうがな」

和樹はテーブルに拳を叩き付け、立ち上がった。「じゃあな、名探偵」

「……ここに来る前に、幸村久美さんにも会ったわ」

伊織は伝票を持って立ち上がる。「彼女の方は生前つかさに言われた事がずっと心に重く響いていたんでしょね。素直に罪を認めていた。黎を殺せと貴方から受け取ったテトロドトキシシンの容器を持って、これから自首するそうよ。容器の外側にも内側にも貴方の指紋が付いているでしょうね。確実に」

「このゲス野郎！」

和樹は拳を固めて伊織を睨む。だが、そのまま動かなかった。

「彼女が貴方を愛しているという、何よりの証拠じゃ無い？」

伊織は少し口元を上げる。「私は貴方を許せないけれど、貴方を許してくれる人は居るんだという事、絶対に忘れないでね」

和樹は暫く呆然とした後、諦めたかの様に席に戻り、まだ手が付けられていないコーヒーを飲み始めた。苦い表情だった。

伊織は彼に背を向け、そのまま歩き始める。二人分のコーヒーの会計を済ませた後、カフェを出て、表参道へと足を進める。

穏やかなセピア色に染まる夕闇の世界。

私の周囲に存在するその世界も又、平和だった。もしかすると神様のシナリオには、誰にでもすぐ幸せになれる道が隠されているのかも知れない。幸せな人間はそれを知らず知らずの内に選び出し、今日を生き続ける。

少し傾けただけで喉を潤す事の出来る、あのラムネの様に。

——了